



埼玉県立浦和西高等学校
Urawanishi High School

発行日 令和4年5月18日
学校通信 ~ 西高は今 ~
<http://www.urawanishi-h.spec.ed.jp>

確定した意見は深い眠りにつく

参与教頭 増淵 則敏

地域の活性化のカギを握っているのは「よそ者・若者・ばか者」といわれることがあります。三者に共通する特徴は、固定概念にとらわれず客観的に考えられるということでしょう。固定概念にとらわれず客観的に考えるという視点は学校にとっても重要ではないかと思います。4月1日、辞令交付式で校長から次のような話がありました。

転入者の皆さんには、ぜひ新鮮な目で本校を見ていただき、本校のよいところ、悪いところを感じ取っていただきたいと思っています。半年もすれば学校に慣れてしまいます。着任時の今がチャンスです。新たな視点から本校を見ていただき、よいところも悪いところも気付いたところはぜひ声に挙げてみてください。皆さんが、「いいな」と感じたことは、きっと保護者や地域の方も同じように感じていただいているはずだし、「おかしいな」と思ったところは、外部の方にも疑問にうつつていることと思います。いいところはもっともっと高めて広めていきたいし、悪いところは改善していきたい、その原動力として皆さんの力に大いに期待したいと思います。

「いいところはもっともっと高めて広めていきたいし、悪いところは改善していきたい、その原動力として皆さんの力に大いに期待したい」という校長の言葉を、転入者の一人として厳しく受け止めました。

本校は令和6年度に創立90周年を迎える歴史と伝統ある進学校です。他校にはない本校ならではの校風があります。大事にしなければならぬと思っています。と同時に、伝統とは同じことを単に繰り返すことでも固守するものでもなく不断の革新により更新すべきものである、変わらぬためにこそ変わらないなければならないことがある、そう思っています。本校が築いてきた歴史と伝統を大事にするためにも、継承すべき成果と解消すべき課題を峻別し、「いいところはもっともっと高めて広めていきたいし、悪いところは改善していきたい」と思います。

イギリスの哲学者ジョン・スチュアート・ミルが、「人は疑わしいと思わなくなったことがらについては、考えるのをやめたがる。それが人間のどうしようもない性向であり、人間のあやまちの半分はそれが原因だ。『確定した意見は深い眠りにつく』とは、現代のある作家の言葉だが、まさに至言である」（『自由論』光文社古典新訳文庫 2012 p.106.）といっています。ミルがいう「現代」とは19世紀のことですが、ミルが引用した「現代のある作家」の言葉は、21世紀の今でも「至言」といえるのではないかと思うのですが、どうでしょうか。

夢を現実とするために

～第1志望を目指した74期生の受験報告～

進路指導主事 山田誠一

今年3月に卒業した74期生は国公立大学52名、私立大学1232名の合格者を出しました。73期生に比べ国公立大学合格者は減少しましたが、私立大学については大きく躍進しました。合格者が初めて1000名を超えた昨年度の1169名を更に超える結果となりました。また、下のグラフから見てとれるように、記録として残っている平成15年以降では早慶上理とGMARCHは最高数値となりました。これは受験者数が大幅に増えたことも要因の1つです。受験者数は前年比、早慶上理は56名、GMARCHは140名の増加となっています。国公立大学では昨年よりも受験者数がかなり減少し合格者数が減少しましたが、北大・東北大・東大・東工大・九大という最難関大学に挑戦した生徒がいました。いずれにしてもコロナ禍で不安を抱えながらも志望を下げることなく挑んでいった証といえるでしょう。入試方式別では、私大指定校推薦が34名から30名と減少。公募制推薦は国公立大と私大を合わせて51名から45名、総合型は35名から14名と大幅に減少しています。一般選抜を選択した生徒が多かった学年でした。

昨年の受験報告でも書いたのですが、本校の3年次における進路指導の目標は「主体的な進路選択」であり、自分の進路のことですから【自分で調べ、自分で考え、自分で決める】ということを生徒に要求しています。74期生はここ5年間では国公立大学への進学者が少な

く、難関私立大学への進学者が多かった学年です。一般的に進学校は国公立大学の合格者数で評価されることが多いのですが、生徒が考えたうえで選択した道です。生徒一人一人が本当にやりたいことができる大学を選択しての結果だと受け止めています。すべての受験が終わったときに、自分の選択に後悔がなければいいと思っています。

私と3年生の接点は主に授業ですが、関わる人数は学年のごく一部です。進路指導をするうえで一番大切なのはコミュニケーションなので、生徒が進路指導室に赤本を借りに来たときの会話を大切にしています。1学期の会話で生徒から返ってくる言葉は、「大丈夫なのかな」と心配させるような内容でしたが、秋が深まってきくと「いろいろと深く考えているんだな」と感心することが多くなり、受験を通しての生徒の成長を実感することができました。生徒は、いろいろな話をしてくれます。不安を抱えて相談に来て、涙を流していく生徒もいました。その生徒は国立大学の前期日程で合格。2月の中旬過ぎ、早稲田大学の受験前日に進路指導室に来て決意表明をして帰っていった生徒もいました。因みにその生徒も見事合格。

74期生の奮闘ぶりを見てきた新3年生(75期生)は、既に自習室の主役になっています。早朝から登校し、教室で勉強している生徒もいます。進路指導室で資料を閲覧していく生徒も増えました。私が理想としているサイクルが動き始めたように思います。



